

---

# お姫様抱っこ

リング

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お姫様抱っこ

### 【Nコード】

N6230R

### 【作者名】

リング

### 【あらすじ】

バンギラスへの愛を書いてみた結果がこれだよ！！ 震災で殺伐としているので、ハートフル小説を置いてみたくなったのであげてみた。

ドシーン！！ 山奥の集落にて、何かデカくて重い物が地面に落ちた音。

「…………無理っ！！」

進化祝いのその日、ピンの父親との挨拶や酒宴を終え、空気を読んだ父親がピュアとピンを二人きりにさせてくれた。雰囲気もよくなってきたところでいつものあれを……と頼まれ、一も二もなくピュアは恋人をお姫様抱っこをしようとして……床とピンの間に手を挟ませながらギブアップした。

「無理ってなによ……今までピュア君、私を支えてくれたじゃない？」

挟まれた腕が痛くて涙が出そうなのに、その言葉で僕はまた涙がでそうになる。

「そんな事言ったって……僕の1.5倍も重くなると、とてもじゃないが無茶じゃないか……昨日までは出来たのに……」

ピンの顔が近い。今まで口が何処にあるかも見えないような彼女の顔は見事に鋭い牙が見え隠れする、トラバサミのようにワイルドで魅力的な口に。さなぎの中で閉じこもっていた四肢も生えて、体つきもすっかり女性らしい下半身に重きを置いた体型に。

ああ、地面を抉り取る鋭い爪も、大木をなぎ倒すたくましい尻尾も、岩を噛み砕く牙も、不意打ちしてきた敵を刺し潰す背中の棘も美しすぎる。あのたくましさならば子供が土砂崩れに見舞われてもピンが守ってくれるだろう。青々とした草にまぎれる黄緑とブルーのカラーリングも綺麗だ。

進化の朗報を聞いて跳び上がって喜んだ今日、今はそんな風に見とれている場合じゃないのに僕の脳は現実逃避をしたがっている。

「はぁ…………恐れていたことが…………」

流線形の額に岩塊のような手を当てて、ピンは落ち込む。恋人補正を含む必要があるが、不覚にもこの可愛らしい動作にピュアは萌えてしまった。ヨーギラス時代以来、再度の二足歩行になれたお陰でこんな動作も可能になったのはとても嬉しいことなのだが、いかんせんその副作用で今のピンは……重い。

「ホントに……ごめん」

申し訳なさそうに言ったピュアは肩を落とし、冷氣交じりのため息を吐く。今日はめでたい日だと言うのに、お祝いも佳境に入ったというのに　この気まずい雰囲気。いやはや、どうすればいいのやら？

しかし、自身（の体重）が原因で肩を落とす男の子を見ていれば、女の子は誰だつて申し訳ない気持ちになるもので。

「ごめん、私のほうこそ……無茶言つてごめんね。今度ダイエットでもするわ」

それでも、まだピンはお姫様抱っこをしてもらうつもりらしい。ちよつと待つてよ、僕の立場は？

「いや、無理しなくてもいいよ……」

苦笑を浮かべる僕が無理をしないで欲しい対象はピンではない。むしろ自分が苦勞をしたくない。サナギラスの彼女を持ち上げるだけでもいっぱいいっぱいなんだ、彼女がダイエットなんぞ始めてしまえば、僕もそれに応えるべく過酷なトレーニングに身をやつす必要が出てくる。

今のままで十分美しいのだから、ダイエットなどしないで欲しいと切実に思っていた。しかし、彼女の次の言葉が何となく予想出来てしまう。

「ううん」

ピンは首を振って笑った。その笑顔の美しさ、花が咲くことを『咲う（わらう）』と記述する理由を納得させるに相応しい、百花繚

乱に勝るとも劣らない華やかさである。無論のこと恋人補正も含まれているのだろうが、恋は盲目なので触れてはいけないのだ。

「ピュア君のためだから」

目的という名の大義名分を相手に押し付けて、ピンは誘惑の上目遣いという手段。願わくば、断らせてほしいのだけれど……

進化する前はあどけなさの残る相対的に大きな眼と、普段は隠れて見えないくらい小さな口をしていた。だが、成長した今は口の形も目付きもすっかりと大人になって落ち着いた雰囲気がある。その上、岩で出来た顔には進化した手特有の歪み一つない整った顔立ちだ。

そんな美しい顔にはめ込まれた潤んだ目でこの必殺技（上目遣い）。土くれや砂嵐から目を保護するための瞬膜\*1も取り払うことで無警戒をアピールして、最大限の眼力を発揮されれば、男なら誰しも心臓がドツキューンとならずにはいられない。

僕達男にはそう言う武器が少なく、ちよつと不公平……ではあるまいか？

「だって、ピュア君私をお姫様抱っこするの好きでしょう？」

美人で性格も良く、それでいて頭が極端に悪いというわけでは無い。

女性として理想形に近いピンであつたが、いかんせんおとボケたところがある。

確かに、僕はお姫様抱っこをするのが好きだけれど。

第一の理由に、自分の腕の中で仰向けになって笑うピンの姿を誰よりも近くで見られる。

第二の理由に、仰向けというのは四足のポケモンにとって無防備な体勢。今は二足歩行になつたが、バンギラスは肩についた棘や体重の重さ故に仰向けが無防備である事に変わりは無い。自分の前であれば無防備になつてもよいという彼女の自分へ対する想いは、ピュアにとってそれだけで宝物だ。

進化したんだから……寝具の上でも無防備になつてくれるだろうか？ などという煩惱も最近では増してきている。

第三の理由に、昔から物語の主人公たる王子様に憧れていた僕にとつては、レックウザに捕らわれたミミロップを助け、ミミロップを抱いて風の如く走るルカリオに対して、大層憧れを抱いていた思ひ出がある。

だから、ピュアはお姫様抱っこをすることを嫌いなわけがなく、暇さえあればやってやりたいくらいだ。しかし、今のピンは大層重い。ピンがサナギラスの頃は軽々と持ち上げられても、バンギラスに進化したピンをお姫様抱っこするのは、彼の言葉を借りるならば……無理っ！

「だから、私がんばって痩せる」

でも、彼女が痩せるのを断るのはもつと無理っっ！！

「俺も体鍛えるよ」

そして……『無理っっ！！』なのに、ピュアはお姫様抱っこをする事を実質誓ってしまう。男って馬鹿だな　ピュアは他人事のように心の中で呟いて、現実逃避を始める。

「やったあ！！　二人で頑張ろうね」

抱きつかれた。もちろん嬉しいので振りほどきたくないし、そもそも相手が怪力すぎてとても振りほどけない。

「ふふ、今までずっとこうやってピュア君を抱きしめてみたかったんだあ」

進化するまでピンが抱きつくことなんて出来なかったから、幼少時代を卒業して以後のピュアが、母親を除いた異性に抱かれるのはこれが初めてである。熱を持たない草と氷で構成された体へ急速に熱が生じ、考えてはいけないエッチな考えばかりが浮かんできた。

ともかく、その邪淫的な煩惱を少しでも追い出すために、ため息交じりのピュアは考えた。

さて、どうやって体鍛えようかな？

＊

体を鍛えるつたって、一朝一夕で身につくものではない。それにあまり急速にやり過ぎて体を壊してしまつては、元も子もない。やはり、地道な肉体労働が一番現実的な手段であるように思える。

のだが、その肉体労働に重い物を持ち上げる機会があるかと言えば結構微妙な所である。

頭上に実るは枝に生えたばかりの未熟な青く小さい果実。甘酸っぱい果汁を滴らせる赤い果実となるには程遠い。運動と言えば、せいぜい脚立を持ってそれに上り未熟な果実をねじ切る摘果＊2くらいの動作しかない。むしろ上り下りに四苦八苦する脚力の方が付いてしまうのではないか？

もちろん、彼女を支えるには脚力を鍛える必要もあるのだろうけれど……このままで僕の1・5倍近い体重の彼女を支えるなんて……

…僕の腕力では無理っつー！！

少しでも、筋力が上がるように　と、僕は張り切って仕事をしてみたけれど、これはキツイ。なんというかあれだ、休み時間が本当に恋しくなるようになった。

ピンの父親にしてこの果樹園の持ち主もその変化を感じ取っているようである。

「俺の娘が進化してから、ピュア君では仕事に精を出すようになったなあ……そりゃ、嬉しいことだけれどなあ。あんまり頑張り過ぎると体に毒だぜ？　適度に休みなさんな……お前に体を壊されて困るのはお前さんだけじゃねえんだ」

だから、こんな事を言われてしまふ。今のピンは、父親のボスゴドラ　チャガと二人暮らしで、このまま関係を進めていけば僕が婿養子になるのだろう。チャガの言う困るという事は『家族だから困る』と『仕事が遅れるから困る』の両方の意味が込められている

分、最近体にガタがきている僕は耳が痛い。でも、反対に心は暖かくって、実家とは大違いだ。

僕が大根栽培をやっていた実家では、兄弟の中では一番の末っ子の僕が労働力として宛てにされる事も特に無く、収穫や植え付けなどの最盛期のおまけみたいな扱いでしか必要とされていなかったというのに。

収穫祭と一緒に踊って知り合ったこの家の主人に人手不足だと誘われ、このリンゴ園に来てみたら今までの生活が嘘のように必要とされてしまった。とりわけ、サナギラスの状態では日常生活が不便な一人娘のピンに必要とされているのが嬉しかった。街へ下りた時のためにお金稼いだけのつもりでチャガさんに世話になったが、今となってはもう泊まり込みもザラで、家にいる時間よりもこっちに

いる時間の方が長い始末だ。

それで、今現在だ。問題のお姫様だっことは、ガスを噴射してしか移動できないサナギラスからバンギラスに進化した今となっては、ピンには必要のないものだ。そして、必要ないとわかっていても、互いになんとか求め合ってしまうものなのだ。必要とされるのが嬉しい僕と、尽くしてもらえるのが嬉しいピン。うん、我ながらお似合いだと思う。

だからそう、

「体を壊したくないのは山々なんですけどね………なんというか、腕を鍛えたくって」

なんて思ってしまうのだ。

「おいおい、果樹園は腕力で支えていくものじゃないぜ？ リンゴへの愛が支えていくんだよなあ………これが」

言いながら、木の幹に頼ずり。ボスゴドラは見た目によらず木や庭の世話をしたりするのが好きと聞くが、本当にこの土地を誇りに思っている事が伝わってくる。

「あはは………木と間違えて間違えて僕に頼ずりなんてしないでくだ



「さいよ？」

「しないしない。触れたとたんに冷た過ぎてすぐに分からあー！！  
あ、もしかしたら冷た過ぎて頬擦りした瞬間にくっついちゃって離れたくつても離れられないなんてのもあるかもなあ。」

その時は俺と結婚するかい？」

チャガは縁起でもない事を言っただハッハと豪快に笑う。その時は

「あはは、その時は結婚しましょうか？ 男と結婚とかそんなの嫌ですから、そうならないように気をつけます」

その時は という言葉がなんだか嬉しい。『その時』ではない時は、ピンと結婚しろと言われていたようだし、『くつつく』という言葉にも僕の邪な（ある意味ピュアな）考えを蜂起させるに事足りる。願わくば結婚してピンとあっち系の意味でくつつきたいなんて、男として当然の感情だけれど……まだ結婚もしていないから考へちゃダメ。

でも、転機というのは唐突だ。

「いや、気をつけるよりも、もっと確実な手段があるぞ？ 先手をうって俺と結婚できなくすればいいんだ」

まあ、ここまでで僕はチャガの言いたい事を半分以上理解した。

「先手を打って……先に結婚しておけてことですか？」

「おう、察しがいい。お前は働き者だし、娘もお気に入りだ。まだ、娘には話していないけれど、ハレの舞台への豪華な食事に綺麗な服を買う為の蓄えはあるんだ。後は、相手と娘さえよければってこと。この進化を期にな……出来るならば早めに済ませてしまいたいんだ」

「若いうちに……ですか」

ピンの母親キキはピンを産み落とした後、ピンが孵化する前に死んでしまった。原因は、高齢出産による衰弱。チャガとキキは年の差のある結婚だった。

「ああ。子供産んで死にまうのだけは何としても避けてほしい

からなあ……若いうちに済ませたい欲しいんだわ。うん、でもまあ、お前らはまだまだ若い。再来年だろうが十年後だろうが、力力アのおっちゃんだ年齢には及ばんわなあ。でも、不安なんだわ」

「ピンと結婚ですかあ……考えるまでもないんだけれど。僕にとっではするか否かではなく、いつするかって問題だなあ……」

どうしよう。恥ずかしい。

「んまあ、ホント急ぐなよ？ 何も、進化だけが切っ掛けってわけじゃねえさ。ピンにも同じ事言って来るからよあ、その時は……まあ、その時もピンとお前次第だわなあ。」

とりあえず言いたいことはだな……その、お前はいつでも俺の家にいてもいいってこった。な、ピュア？ 思い立ったが吉日とも言うからよ……天国のキキの奴にも早いとこ嫁入り見せてやりたいんだ」

妻の顔を懐かしむようにチャガははにかむ。本当に、この家族は僕の求めているものを持っていてくれる。僕を必要としてくれる事がこんなにも嬉しいなんて知らなかった。

「そんなこと言われると……本当に体壊せなくなっちゃいますね」

「おう、体は大事よ。特に腰には気をつけろよな？ 女を喘がせるに腰が砕けちゃったら、夫婦の夜はなりたたねえわなあ」

あまり女性のいるところでは話せない、下品な会話を挟みつつ会話が弾んでいる後ろで、ドシンツという可愛らしい（怪獣グループの考えは理解できないとよく言われます）足音が響いて、二人は振り向いた。

「仲いいわね、二人とも。お昼ごはんの採掘出来たから、会話も切り上げちゃってご飯にしちゃおうよ」

「おう、お前の鉄鉱石はいつも美味いんだよなあ」

正直、同じ場所で採掘される鉄鉱石の何がどう違うのかは分からないけれど、気にしたら負けかな。

「ちょっと、父さん。私は料理だつてうまいんだから。鉱石の採掘の腕だけじゃないのよ？」

「そうそう、僕もピンの料理好きだよ」

結婚すれば、こんなやり取りが途切れることなく続くようになる。それはとっても魅力的なことだ。

\*

時は過ぎて収穫期。冬も近い。僕はユキノオーという種族からむしろ元気になるくらいだけれど、やっぱりピンやチャガには辛いみたい。あれから腕力は少し上がったのだけれど、やっぱりまだピンは持ち上がるそぶりすら見せない。ピンもまた、冬を迎えようという今痩せているのは自殺行為に他ならないから、と……太って精をつけなきゃいけないわけで、程良く脂肪をため込んだ彼女は痩せた時よりも遥かに魅力的だ。

あの一撃で大木をなぎ倒してしまいそうな太い尻尾もドンメルのコブのように栄養を抱え込んでいるのかさらにたくましくなった。あれ、もしかして僕にお姫様抱っこさせる気ないんじゃない？

と、ともかく……収穫が終わったら結婚しようとも思ったけれど、どうしよう？

今の一番魅力的な彼女をハレの舞台に立たせるというのなら申し分ない。けれど、恥ずかしい……僕は名前の通り無垢なんだから、ここはピンが切りだしてくれと嬉しいなあ。

なんて、弱気ではいけないのだろうけれど。この季節は、街まで果実を売りに行くので筋力が上がる……と良いな。しかし、筋力を上げるべきだと言うのに、彼女の方がよっぽど大きい荷物を持っている気をするのは気にしちゃいけない見ちゃいけない！

どーせ、生まれつきの種族差は埋められませんよ。

とにかく、こんな情性を続けてはいけない。切っ掛けだ、切っ掛けを掴まなくっては。きっかけさえあれば、僕たちはいつでもくつつく事が出来るはず。でも、切っ掛けなんて空から降ってくるわけでもないのだから、自分で見つけるしかないんだよね。

ホント、切っ掛けが何処かに落ちていないだろうか。

そう思いながら、収穫四日目の深夜。切っ掛けは落ちてた　と　いうか、切っ掛けが飛び降りた。『なんか、収穫してないはずのリンゴの木から木の実がなくなっているような気がする』とチャガさんが言う。他の畑でも農作物が奪い取られる被害は多数に上っているから念のため　と、見張りに来てみたら案の定。

「お前か、このドロボー!!」

叫んでみた。とりあえず叫んでみた。でもこれ、僕にどうしろと？　いや、その……相手バシャーモだし。

ここは地面が固いから足跡が特に残らないみたいだけれど、他の現場に残された足跡や匂いからそうなんじゃないか……とささやかれていた犯人はバシャーモ説……僕が見つけてしまうのは運がいいのか悪いのか。

「俺をつかまえる気か？　ギロリッ」

ダメだ。睨む時でさえ擬音が幻聴として聞こえるほど怖い。なんというか、この家の家族構成を把握して狙ったかのように酷いタイプ構成。バシャーモの蹴りなんて喰らってしまえば、僕もピンもチャガさんも一撃だ。

そして、二人はまだしも僕にあいつへ有効なダメージを与えられる技なんてない。あるとすれば……絶対零度くらいか

顔や種族を知られた以上、もうこの家には来ないかもだけれど……ハッサムの一家のドロボー被害といい、ザングースのところといい、皆弱点の家族経営ばかりが狙われている。

こんなことなら、水タイプやエスパータイプでも警備に雇う金なんてないからどうせ無駄か。そんなことは地主でもない限り不可能だ。

「まあ、なんにせよ。顔を見るなんてのは頂けねえなあ。ちよつとばかり、記憶すつ飛ばしてもらおうか？」

まあ、なんにせよ。捕まえる見逃すではなくてやられるかやらないかという問題になってしまった。見れば見るほど良い脚は赤々と燃えていて如何にも熱そうだ。あんな脚で蹴られたら死ねる、僕、殺される。

逃げようにも、僕の脚はきつとバシャーモなんかより遅い。後ずさりしたって無駄。徐々に追い詰められるだけで、むしろ後ろがみえていない分僕の方がはるかに不利に追い込まれるのは目に見えている。

僕が勝っている事なんて体重と身長くらいしか。適当に後ずさっていたら、木の周りに引き抜かれた雑草が積まれていて、その後ろには大事なリングの木。いよいよ追い詰められたわけだ。このまま振り向いて逃げようとするれば、その瞬間に後頭部に蹴りが飛ぶ。そうなれば、勝率はほぼ0%。ならば、少しでも勝てる手段を考えろ……そうだ。バシャーモなんて、サナギラスの頃のピンよりもずつと軽い。

一撃。一撃耐えたら組み伏せて脚掴んで持ち上げて、絶対零度してジャイアントスイング\*3で叩きのめしてやる。絶対零度なら一撃必殺だし、掴んでいれば絶対零度だって当たる。

冷静になれ……相手をよく見る。目線は上へ固定しつつも視界の端で脚を見るんだ。左脚が大きく前に出た、右脚が後ろ。つまり、蹴りは十中八九右足から来る。

蹴りが来た。当たった、痛い。けれど、右脚が来るのが分かったから防御も出来たし、僕の首は太いんだ。この程度で脳震盪を起こしてやるほど柔じゃない。

防御した左腕はしばらく使いものになりそうにない。けれど、それで構わない、バシャーモは見た目よりも軽い。だから片手でだけでも……

「うおおおおお!!」

片手で逆さづりだ!! お姫様抱つこのために鍛えていた僕の腕力なら、軽いバシャーモくらい楽勝だ。手首をひねりながら掴みあげたから、炎を吐く口は上手い具合に反対方向を向いている。目の前がくらくらはして足元がおぼつかないけれど、手のちからがおとろえているわけじゃない。

あとは、ちからをこめてこおりのなかにとじこめる……

\*

そして気が付けば僕は、ピンの腕の中に抱かれて運ばれていた。体型の都合上、多くの人型のポケモンと違って怪獣の僕たちは背中  
に手が回らないから背負うことはできず、どうやらピンに抱えられているようだ。瞼を開けると斜め上にピンの顔が見える。

「よかった、気が付いた……」

命に別条のない傷だったのか、ピンは僕が生きていたことには驚かない様子。しかし、自分自身の胸に乗っけられている左腕がすごく痛い。

「ドロボーが……僕、やっぱり負けちゃったのか」

とにかく、真っ先にそれが気になった。

「負けたわよ……喧嘩なら」

ピンは肯定しているのに何故か笑った。何故？

「でも、勝負には勝った。貴方の声が聞こえたから駆けつけてみれば……酷い凍傷のバシャーモが這って逃げようとしていたから、これ幸いと父さんと私でストーンエッジでぶっ飛ばしちゃった。今は家で応急処置済ませて、病院に連れて行くところ。

父さんはとりあえず犯人連れてお役所ね……」

「そっか……」

自業自得とは言え、怪力に定評のある二人がタイプ一致で放つ岩タイプの攻撃を二回分喰らった不憫なバシャーモの惨状を僕が想像して、僕は憐れむと同時にいい気味だとほくそ笑んだ。

ピンは僕の胴体のせいで”かろうじて”しか前が見えない視界に四苦八苦しながら、気分よさげに僕の顔の方に視線を下げる。

「かつこよかったわよ」

「え、」

と、僕は顔を上げる。

「いや、実際には貴方の雄姿は見えていないわよ？ もちろん。でも、バシャーモに立ち向かったなんて事実そのものがかつこいいのよ。ユキノオーのくせに、あんな不利な相手に向かって行くななんて馬鹿みたい」

「馬鹿みたい……確かに否定できないね。けれど、リングはこの家の大切な財源だし食料だし……僕達には必要だから」

この時ピンから漏れたのは、呆れと愛おしさの混じる溜め息だったのだろうか。

「リングも大事だけどピュア君の命ほどじゃないんだから……馬鹿」

『馬鹿みたい』から『馬鹿』に昇格されて、なんだか笑ってしまった。まだ傷が痛くって上手く笑えやしないけれど、すごく安心したほのぼのとした空気。今なら、言える。

「馬鹿でもいいから、僕と結婚してくれないかな？」

今度は、ピンが笑った。クスクス から、どんどん盛大な笑い方になってしまつので、すごく恥ずかしい。

「笑わないでよ」

「だってえ、お姫様だっこをしてもらえたら結婚しようって思っていたのに……」

ごめん。それ半分あきらめてた。っていうか、軽石か何かでも使

わないと無理だと思う。

「自分がピュア君をお姫様だっこをした時に告白されるなんて……  
ちよつと意外だったから」

そう言えば、今の恰好は正しくお姫様だっこ。気づいてしまうと、  
なんだか恥ずかしい。

「これじゃ、王子様だっこだね」

「うん、でもそれで良いと思う。私が求めてばかりじゃなく、たま  
にはピュア君の求める事をしてあげたい。だから、ピュア君が求め  
るものが私と結ばれることならば……私も、結婚したい」

なんだか、当初の計画とは違うけれど……ま、いつか。

「ありがとう」

お姫様だっこは最後まで出来なかったけれど、これからよろし  
く。



## （後書き）

さて、お姫様抱っこはお楽しみいただけただしょうか？

結構昔の作品ですが、R - 18 表現のないところまで上げておきます。

私の作品 R - 18 多すぎですねすみませんw かいじゅうグループも可愛いと思います。みんなで愛でてあげてください。

\*1 多くの脊椎動物の眼球の前面をおおって、角膜を保護する透明の薄い膜。無尾両生類や魚類の一部・鳥類・爬虫類では発達しているが、哺乳類では退化して痕跡をとどめるに過ぎない。

\*2 よい果実を得たり、枝を保護するために、余分な果実をつみ取ること。

\*3 仰向けの相手の両足首（または両膝）を脇の下に挟み込んでから抱え上げ、回転しながら相手を振り回し、平衡感覚を失わせることでダメージを与えるプロレス技

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6230r/>

---

お姫様抱っこ

2011年3月15日02時40分発行